

地域と協同の研究センター NEWS

2025 年 12 月 25 日発行

256 号

沖縄での戦争、今の光と影をみつめ、未来へのメッセージを！ 沖縄特別企画の開催と 2 月 21 日（土）報告会のご案内

東海の 3 生協、コープぎふ、コープあいち、コープみえ、大学生協東海ブロック、南医療生協の若手職員を中心に 13 名が沖縄を訪問し学んできた。団長はコープあいち理事長で当研究センター代表理事の森政広さん。11 月 16 日（日）から 18 日（火）までの 3 日間の行程だった。報告会を 2026 年 2 月 21 日（土）に名古屋市金山にある名古屋都市センターで開催します。団体会員、会員のみなさんに参加いただきたい。

沖縄の人の想いを感じた 3 日間

1 日目のガイドは大学生協から紹介を受けた横田眞理子さん。横田さんはコープおきなわの元理事で平和活動に長い間取り組んでこられ、今はガイドもされていて大学生協東海ブロックからの紹介でガイドをお願いした。横田さんは北部の生まれだが、母親が国旗掲揚のときソッポを向いていたと話されていた。ふだんは沖縄戦のことを何も語らないお母さまだったらしい。その根深さ、複雑さを感じた。横田さんとは、ひめゆりの塔（ひめゆり平和祈念資料館）、平和祈念公園、糸数壕（糸数アブチラガマ）をまわった。ひめゆりの塔は沖縄戦で亡くなった沖縄師範学校女子部と沖縄県立第一高等女学校の校誌乙姫と白百合を組み合わせたものだという。教師を含めて 200 人以上が亡くなった。第 3 2 軍の司令官が亡くなった時が沖縄の組織的戦闘が終わった日、慰霊の日になっているが、最後まで戦え「最後まで敢闘…」という命令によって、戦争は終わらず多くの住民が亡くなったと語っていた。南部に映ってきた軍はガマから住民を追い出したとのこと。ひめゆりの塔に入館すると生徒たちの笑顔の写真が出迎えてくれた。とても眩しい笑顔だった。



多くの証言も残されている。

糸数アブチラガマも案内してもらった。とても暗く今でも遺骨が残っていて、歯がいくつも残っているのを見せてくれた。このガマは野戦病院にもなっていて、兵士は人ではなくリサイクル品として戦えるものは応急措置をして送り出し、戦えないものは見捨てられたという。多くの住民が巻き込まれた沖縄戦、その憤り、悲慘さを語ってくれた。



沖縄の海を守る活動にふれた 2 日目

2 日目は、恩納村漁協を訪問し、沖縄の今というテーマで学んだ。恩納村での里海づくりの取り組み、サンゴ礁が育む豊かな海でモズクは育つ。それが 2024 年の夏、30 度を超える高水温、強い日差しが続いたこと、台風が来なかったことなどから多くのサンゴが死んでいった。それを白化現象と呼んでいる。生き残ったサンゴを守りながら新しく植え付けていく作業をていねいにすすめている。全国の生協の組合員が名前を書いて基台は 1 本ずつ片付けられ磨きなおされまた使われるという。思いがこもったものを捨てられないという。3 回に 1 回くらいしかグラスボートは天候の関係で出られないそうだが、その日はサンゴの海を見ることができた。

1 月の日程など

1 月の日程など			
6 日（火）	名城大学ボランティア入門⑯	19 日（月）	岐阜地域懇談会世話人会
8 日（木）	三河地域懇談会世話人会	20 日（火）	三重大学「協同組合論」
14 日（水）	常任理事会	22 日（木）	組合員理事ゼミナール第 8 回
17 日（土）	生協職員マイスターコース第 6 回	25 日（日）	サードセクター研究会
19 日（月）	尾張地域懇談会世話人会	31 日（土）	友愛協同セミナー、協同の未来塾第 7 回
目次	沖縄での戦争、今の光と影をみつめ、未来へのメッセージを！ 沖縄特別企画の開催と 2 月 21 日（土）報告会のご案内 2025 年秋、海を越えた「ささえあい」の旅 韓国・恩平区視察団、愛知・岐阜の地域共生を巡る 3 日間	1 3	地域市民の支えあいから、制度の揺れを見つめる 情報クリップ 書籍紹介「新しい市民協働」を拓く
			5 6 8

白化の様子、生き残ったサンゴに集まる魚たちがキラキラしていたのが印象的だった。沖縄の海を守る活動に生協もつながっている。対応していただいた恩納村漁協、井ゲタ竹内のみなさんに感謝したい。



左から金城組合長、
井ゲタ竹内の竹内常務、
そして栗木さん



グラスボートに乗り込む
視察参加者

戦争の辛い証言を聞くのが嫌だった、そしていま3日目は、フォーブスジャパンの次世代を担う30人に選ばれている狩俣日姫さんにガイドをお願いした。まだ20代だ。沖縄では語り部の継承が課題になっていて、その一人である。まだ二十代だ。狩俣さんは、沖縄の学校で悲惨な語り部たちのお話が辛くて聞くのが嫌だったという。それが留学をして広い視点で沖縄を見るようになり、自分にできることがないかとガイドを始めた。持続的な活動になるよう会社組織にしている。狩俣さんは言う、基地はなくなってほしい、でもそれは世界で同じように基地が減っていくことだと。基地とつながって人々は暮らしている沖縄の現状を語っていた。狩俣さんには、嘉手納基地、激戦地となった嘉数高台公園、これは普天間飛行場が見える。そして第32軍司令部壕のある首里城を案内してもらった。嘉数高台公園にある「青丘之塔」も紹介してもらった。多くの朝鮮人労働者が過酷な陣地構築作業に従事して命を落とし

ていった。狩俣さんは修学旅行のガイドなど熱心に活動されているが、押しのコンサートで名古屋にもよくきたというアクティブな女性だった。



狩俣日姫（かりまた につき）さん

沖縄尚学高校の優勝は沖縄の人を勇気づけた。沖縄ではコープおきなわの元理事長の山本靖郎さんにミニ講演をお願いした。山本さんは41年前に宮崎から移住した人。名刺交換すると本土の方ですかと聞かれるという。沖縄ではナイチャー、内地の人として見られているとのことだった。沖縄はかつて琉球という独立した国だった、沖縄を語るうえ大事なことだと思った。そして長い米国統治の時代。その影響は沖縄の牛乳にも残っていて、コープ牛乳は1リットルなくて1ガロン、946ミリミットルのままである。離島にも生協の商品は届くが自衛隊の家族も多く利用されているし、コンテナで届く荷物の積み下ろしは隊員が手伝ってくれる。基地で働く人も多い、それが複雑さを濃くしている。沖縄のターニングポイントは1995年の少女暴行事件、8万5千人が宜野湾の公園に集まった。それが沖縄の心。沖縄尚学高校が今年優勝したが、県民全体で喜び合う。山本さんは言う。証言を残してきた語り部たちは高齢化しているが、多くの証言が残っている。それなのに事実と違うことをいう人たちが今の世になっていることが悲しいという。沖縄では戦後80年になって亡くなった方一人ひとりのお名前を読む活動、平和の礎（いしず＝沖縄の方言）がすすんでいる。亡くなった24万人を「かず」にしないためだという。山本さんのお話をもっとお聞きしたくて、2月にもう一度講演をお願いした。

（文責 駒井義明）



普天間基地には多くのオ
スプレイの異様が・・・



←視察の様子を少しだけ動画紹介



多くのエピソードを新
聞記事などを使い語っ
てくれた山本靖郎さん

2025 年秋、海を越えた「ささえあい」の旅

—韓国・恩平区視察団、愛知・岐阜の地域共生を巡る 3 日間—

2025 年 11 月下旬、韓国ソウル市の恩平（ウンピョン）区から、地域福祉や協同組合に携わる 10 名の視察団が、愛知・岐阜を訪れました。目的は、日本の「地域共生」や「地域包括ケア」のリアルな実践現場を肌で感じること。行政、生協、そして地域住民がどのように手を取り合い、高齢化や人口減少といった課題に立ち向かっているのか。3 日間にわたる濃密な交流と学びの様子を、エピソードと共にお届けします。

旅の始まりは「人」のつながりから

視察受入れのきっかけは、研究センター会員・韓国「サリム医療福祉社会的協同組合」の理事、「生活クラブ生協（風の村）」で研修経験もある JO・YUSEONG さんから「愛知・岐阜・三重の実践現場を紹介してほしい」という依頼でした。YUSEONG さんの呼びかけに応え、研究センターで受入プログラムを作成。2025 年 11 月 20 日（木）、中部国際空港に降り立った視察団一行は、予定より少し遅れての到着となりましたが、表情はこれからの出会いへの期待に満ちていました。バスに乗り込み、いざ最初の目的地、新城市へと向かいます。

【1 日目】

新城市：条例が紡ぐ「ケアする人」への敬意

最初に訪れたのは、愛知県新城市役所です。ここでは、「福祉従事者がやりがいを持って働き続けることができるまちづくり条例」という、全国でも珍しい取り組みについて学びました。

到着すると、新城市福祉部長が韓国語で歓迎の挨拶をされるサプライズ！ 市役所職員だけでなく、条例づくりに関わった市民の方々も同席し、「条例を作って終わりではなく、どう維持していくのか？」「市民と議会はどう関わっているのか？」といった鋭い質問が飛び交いました。

続いて向かったのは、JA 愛知東の「やなマルシェ」。ここでは住民（農協や生協組合員含む）が地域再生にどう関わっているのかを視察しました。JA 愛知東の海野組合長は、万博会場でイタリアの協同組合と交流した経験に触れながら、「高齢化や地域の課題は日韓共通です」と語

りかけました。加藤久美子さんの説明を聞いた視察団からは、「話を聞いて元気が出た！」と嬉しい感想。ここで振る舞われた地元の柿の美味しさに、「こんなに美味しい柿は初めて食べた！」と感動の声が上がりました。フリーマーケットでの買い物も楽しみ、和やかな雰囲気の中で初日の交流を終わりました。



【加藤久美子さん(右)と】

【2 日目】愛知

2 日目の朝は、名古屋市の「生活協同組合コープあいち（生協生活文化会館）」からスタートです。ここでは、生協が取り組む福祉事業の全容について学びました。

担当の天野執行役員による説明は「現場からの叩き上げ」ならではの説得力があり、視察団からは、「購買事業と介護事業の利益はどうバランスを取っているのか？」「なぜ生協が福祉を始めたのか？」と矢継ぎ早に質問が飛びます。天野役員の丁寧で実務に精通した回答は、視察団の心に深く響いたようです。

また、視察団の多くは日本の生協店舗を見るのは初めて。「どうしても買い物がしたい！」というリクエストに応え、店内を見学しながら日本の生協商品をたくさん購入されていました。

午後は岐阜県各務原市へ移動し、「生活協同組合コープぎふ」本部を訪問しました。バスが到着し、事務所の 2 階へ上がると、なんと職員の皆さんが総立ちになり、拍手で視察団を迎えてくれました。

根崎理事長からは、コープぎふ（東海三生協）の「タノモット」や、たすけあいの取り組みについて説明



【コープぎふのみなさんと】

がありました。帰り際も、職員の方々は再びスタンディングオベーションで送り出し、理事長や専務たちが駐車場まで見送ってくれるという

徹底した「おもてなし」に、視察団は日本の温かさを強く感じた様子でした。



〔ささえあいの家のみなさんと〕

この日の最後は、各務原市の「八木山地区社会福祉協議会」が運営する「ささえあいの家」です。ここは、制度に頼るのではなく、住民自身が支え合う拠点です。特に注目を集めたのは、庭にある工房での活動でした。ここでは、壊れた家電や家具を住民の手で修理しているのです。また、偶然にもこの地区にお住まいの韓国出身の方が通訳ボランティアとして駆けつけてくれるという、嬉しい出会いもありました。

交流会場のふれあいセンターに移動すると、地元の方々20名ほどが大歓迎ムードで迎えてくれました。それぞれの活動がいきいきと語られる中、地元で獲れた天然鮎や、温かい芋煮が振る舞われました。予定時間を過ぎても交流は続き、手土産まで用意された心のこもった対応に、視察団は大感激していました。

【3日目】

豊明・名古屋：医療・福祉がつなぐ地域の輪

最終日の11月22日（土）。まずは豊明市にある共生交流プラザ「カラット」へ。南医療生協・コープあいち・JA愛知尾東の三つの協同組合が進める住民主体型生活支援活動と「おたがいさまの家・ちゃっと」の活動を視察しました。ここでは、地域のお困りごとをつなぐ「コーディネーター」の役割について熱心な質疑応答が行われました。



〔ちゃっと・南医療生協のみなさんと〕

お昼は「名古屋キリスト教社会館」を訪問。

バザーで賑わう中、食堂で昼食をとったあと、会議室に移動して法人の歴史や、日本と韓国の福祉制度の違い、あいち在宅福祉サービス事業者懇談会の活動を学びました。保育園や障がい者グループホーム、高齢者デイサービスなど、多世代が共存する現場を見学し、屋上から天白川を眺めるひとときも。

旅の締めくくりは、「南医療生活協同組合（南生協病院）」です。ここでは、医療や介護だけでなく、フィットネスや図書館、さらにはパン屋さんまでが一体となった「総合的な地域医療」の姿を目の当たりにしました。視察団にはこれまでに南生協病院で研修したメンバーもいて、病院という枠を超え、地域住民が日常的に集う場所としてのあり方を、自らの言葉で説明していました。

視察を終えて：海を越える「共生」への願い

3日間の行程を終え一行は帰路につきました。今回の視察プログラムで留意したのは、「住民が主役」であることの大切さです。新城市の条例も、やなマルシェも、八木山地区のささえあいも、名古屋キリスト教社会館の設立経過も、南医療生協のおたがいさま・コーディネーターも、すべては「誰かにやってもらおう」のではなく、「自分たちがどう暮らしたいか」という住民の思いから出発しています。

視察団が持ち帰ったのは、制度やノウハウだけではありません。「こんなにおいしい柿は初めて」「ファンができた」「話を聞いて元気が出た」。こうした言葉に象徴されるように、国境を越えて同じ課題に向き合う仲間としての「連帯感」こそが、最大の収穫だったのではないのでしょうか。

韓国・恩平区と日本の東海地方。それぞれの地で、それぞれの文化に合わせて「地域共生」の花が開いています。今回の視察は、その花々が互いに種を運び合い、より豊かな社会を育てていくための、確かな一歩となりました。視察団の皆さんが、この旅で得たヒントを韓国の地でどのように花開かせるのか。そしてまたいつか、この愛知・岐阜の地で再会できる日を、心から楽しみにしています。

（文責 向井 忍）

地域市民の支えあいから、制度の揺れを見つめる

(地域と協同の研究センター研究員 神田すみれ)

12 月 14 日（日）、生協生活文化会館にて「難民食料支援 仕分け発送」を行いました。高校生・大学生・社会人、そして難民の皆さん、共同主催 3 団体のメンバーを含め計 44 名が集まりました。4 つのグループに分かれて、10 世帯分の食料品・生活雑貨のパッケージを作成しました。冒頭では、難民の方々が安心して過ごせる場づくりのため「写真を撮らない」「出身国を訊ねない」「ニックネームを使う」等のルールを共有。送付先については、地域・家族人数・ハラル対応の有無など必要最小限の情報のみを確認し、プライバシーに配慮して作業を開始しました。会場内の分類テーブルから、世帯ごとの条件（家族構成、食品の可否、困窮度）を踏まえつつ「公正に」分け合い、段ボールへ丁寧に詰めていきました。箱には、難民の方たちへの応援メッセージと、返信に使っていただくカード作成セットも同封。最後に 10 世帯分を一箇所に揃えて作業完了です。

作業後は、お茶とぜんざいを囲んでグループごとに交流し、その後全体で、各グループから 2 名ずつ感想を共有しました。学生からは「前回顔見知りになった難民の方から久しぶりだね、と声をかけてもらって嬉しかった」という感想や、難民の皆さんからは「ここでの出会いが心の支えになる」「自分も誰かの役に立ててうれしい」「日本にも南米へ移住をした人たちの歴史があると知った。その人たちの経験から学びたい」といった言葉もあり、互いの尊厳を確かめ合う時間になりました。継続参加の大学生 3 名からは、授業内でメッセージ作成や食品提供の呼びかけを行い、ポスターを作成してキャンパス内で協力の輪を広げたことも報告されました。こうした小さな実践が、次の参加者を呼び、地域のなかで学びが循環していることを実感します。パッケージは当日発送し、翌日に地域に暮らす難民世帯へ届きました。



東海コープから
寄贈された雑貨
品を仕分け

一方で、この数か月は在留資格の運用が一段と厳格化し、生活と仕事の基盤が揺さぶられています。起業家向けの在留資格「経営・管理」では、資本金等要件の大幅引上げ（500 万円→3,000 万円）

など新基準が示され、地域で小さく事業を始めたい人ほど壁が高くなる懸念があります。留学生の資格外活動は「週 28 時間以内」が原則ですが、入国時に申請すれば原則許可される仕組みを見直し、就労状況や勤務時間の管理を厳密化する検討も報じられています。アルバイトの収入で生活費や学費を賄う留学生、そして人手不足の現場（小売・飲食・介護等）への影響も見過ごせません。



当日寄せられたタオル

また「技術・人文知識・国際業務」（いわゆる技人国）をめぐるのは、派遣形態で本来想定されない単純作業に従事するケース等を背景に、入管当局が実態把握と是正を強める動きが伝えられています。企業側には、職務内容の整合性、教育・評価、記録の整備など、採用後の伴走がより求められます。手続き面でも、在留期間更新等の手数料は 2025 年 4 月から改定されたばかりですが（窓口申請で 6,000 円）、さらに、更新等を 3 万～4 万円、「永住者」の手続きを 10 万円超へ引き上げる案が政府内で検討されており、毎日のように「私たちはどうなるのか」「日本にいらなくなってしまうかもしれない」という不安の声や相談が寄せられています。

制度が変わるほど、地域での「支えあい」は重要になります。お互いが孤立することなく、必要な情報と手渡し、つながりをつくっていく主体となり、食料支援の現場で生まれた小さな信頼を、相談・就労・学びの場にもつなげていくことです。協同組合は、日々の暮らしを支える経済組織であると同時に、排除を乗り越える社会的インフラでもあります。地域の声を集め、対話と提案につなげていきたいと考えます。

今後も定期的に「仕分け発送」を継続し、寄付食品の募集やボランティア参加の案内は研究センターの SNS 等で発信します。可能な範囲での食品提供、メッセージ作成、当日参加、そして制度変更による困難の声の共有に、ご協力をお願いします。

(かんだ すみれ)

情報クリップ

co-opnavi 2025. 12 No. 883

『CO・COnavi』はデジタル版にリニューアルして皆さんの元に戻ってきます!!

日本生活協同組合連合会 2025 年 12 月 A4 判 40 頁 363 円 (消費税込)

<私たちの「この一枚」> 京都生協
50 回目の節目を迎えて「も～も～キャンペーン」
サステナビリティ推進部 広報担当 喜多麻由

特集

デジタル版にリニューアルして皆さんの元に戻ってきます!!
<今日も笑顔のコープさん> 医療福祉生協おおさか
<想いをかたちに コープ商品>
CO・OP 国産ブロッコリー
<生協大好きママ コプ山さんの 教えて! CO・OP 商品>
CO・OP まるごとフルーツブルーベリー
<2025 国際協同組合年>
(ICY2025) を知る

<組合員に支持される店づくり・売場づくり>
(株) REA 取締役会長 鈴木哲男氏
<日本全国宅配現場におじゃまします>
福井県民生協

<本田よう一のいつもの台所>
<生協の DE&I 多様性のある職場をつくろう>
コープみらい・コープデリ連合会
<この人に聴きたい>
子育てインフルエンサー 木下ゆーきさん
<ほっと navi>
みやぎ生協・コープふくしま / コープさっぽろ

生活協同組合研究 2025. 12 VOL. 599

消費者教育の現在～生協と学校・大学の連携の可能性～

公益財団法人 生協総合研究所 2025 年 12 月 B5 判 96 頁 定価 550 円 (消費税込)

巻頭言

複合危機の時代における生協
～協同組合としての価値とあり方～ 河田喜一

特集

消費者教育の現在～生協と学校・大学の連携の可能性～
消費者教育の過去・未来・現在 西村隆男
学校における消費者教育の到達点と課題 神山久美
大学における消費者教育の必要性
一岐阜大学で取り組む事例から一 大藪千穂
消費者庁が取り組む消費者教育について 中川壮一
NACS における消費者教育の実践と目指すもの 米山眞梨子
消費者シティズンシップを涵養する
一消費者教育の展望と課題一 平野寛弥

座談会 「学校の家庭科教育現場での
消費者教育の課題と生協への期待」
野中美津枝・津村 徹・西村牧子・若月温美
コラム 消費者教育における生協と学校との連携について
一「学校教育に役立つ学習ガイド」などの活用事例から 松尾 掌
■IYC2025 の機会に協同組合の価値を再考する (第 9 回)
くらしサポート・ウィズの取り組み
一一般社団法人くらしサポート・ウィズ専務理事
中根裕さんに聞く一 柳下 剛
■国際協同組合運動史 (第 45 回)
1976 年第 26 回パリ ICA 大会 鈴木 岳
■本誌特集を読んで (2025・10) 圓尾佐智子・天野博幸
■新刊紹介 富永京子著
『なぜ社会は変わるのか はじめての社会運動論』三浦一浩

文化連情報 2025. 12 No. 573

水田作農業の困難と課題

日本文化厚生農業協同組合連合会 2025 年 12 月 B5 判 96 頁 文化連情報編集部 03-3370-2529 * 注

農協組合長インタビュー (110) 伊勢農協
「なくてはならない J A」を目指して 酒徳雅明
医薬品等の購買・流通をめぐる情勢
～購買担当常参・部長合同会議報告より～
第 28 回厚生連病院と単位をつなぐ医療・福祉研究会視察報告
品川リハビリテーションに学ぶ

複合型地域包括ケアの拠点づくりと地域貢献
水田作農業の困難と課題 田代洋一
考論 災害と地域づくり (3)
被災者の人権が尊重される避難所を目指して 石井美恵子
二木教授の医療時評 (238)
高市自民党総裁の医療公約は積極的だったが

高市自維連立政権の医療政策は不透明
農高生と地域をつくる
～我はいかにして農業高校教員となりしか～ (11)
畜産専門の教員として
多様な福祉レジャーと海外人材 (87)
移民とヤングケアラー
江南厚生病院
地域医療機関共通のガイドラインを活用して
身寄りがない人で意思決定が困難な人を支援
野田智子
臨床倫理メディスン (85)
令和の米騒動に観る倫理的課題
一食と社会をめぐる歴史的省察一
中西淑美

オンライン研修の充実によって意識改革を
ー第 74 回日本農村医学会
学術総会 文化連ランチョンセミナーー
デンマーク & 世界の地域居住 (196)
介護士のシェアリングで
介護保険サービスを提供① 松岡洋子
書籍紹介
農業の協同・協業の課題ー農協・集落営農・農政
自著を語る
危機に瀕する日本農業 新基本計画は脱却の道筋を示
しえたか 東山 寛

にじ 2025 年 冬号 No. 694

農業・農村における女性の活躍推進のために

一般社団法人日本協同組合連携機構 2025 年 B5 判 62 頁 1100 円 (税込)

オピニオン

○ポスト I Y C 2 0 2 5 の幕開け
山下富徳 (日本協同組合連携機構 常務理事)

特集企画

農業・農村における女性の活躍推進のために

○農業センサスでは女性をどのように把握できるか
佐藤真弓
(農業政策研究所 (農業・農村領域) 主任研究員)
○農業法人で働く女性 異なる立場から
和泉真理 (日本協同組合連携機構 客員研究員)
○ビジネスとコミュニティの両輪を回して、
里山を心動く世界に
ー農山村における女性活躍の突破口ー
佐藤可奈子 (women farmers japan 株式会社 取締役)

○「農家レストラン」から見る
「農家女性」活躍のポイントと支援
ー山形県鶴岡市「穂波街道 緑のイスキア」の事例からー
大友和佳子 (JA 共済研究所 研究員)
○農家女性のパワーの結集軸としての
女性コミュニティの意義
ー長岡周辺地域女性農業者コミュニティ nowa 座談会よりー
小川理恵
(日本協同組合連携機構 基礎研究部長 主席研究員)
ヨーロッパの食料・農業・環境・協同組合シリーズ
第 65 回

オーストラリアの 2 人の女性農業経営者
和泉真理 (日本協同組合連携機構 客員研究員)
編集後記 小川理恵
(日本協同組合連携機構 基礎研究部長 主席研究員)

地域・協同の運動、協同組合に関する文献資料、協同組合・生協関係の研究所などの調査研究成果や研究センター会員の研究成果などから、比較的入手しやすいと思われるもの、寄贈いただいたもの(*)などを中心に順不同で紹介しています (主な内容は目次等から事務局が要約しています)。詳細は研究センター事務局までお問い合わせください。

書籍紹介


 地域と協同の研究センター 石橋 一郎会員からの書籍紹介
 「新しい市民協働を拓く」ハーバーマス、ロールズ、センの思想から考える

著者：向井清史 発行日：2025 年 10 月 出版社：藤原書店

単行本：232 ページ 価格：2,420 円（消費税込）

名古屋市立大学名誉教授の向井清史先生の新著をご紹介します。まず「新しい市民協働」の何が新しいのか。活動スタイルとして①積極的な他団体との強い連携意欲、②連携が地域や業態の違いを超えてすすんでいる、③各種団体で活動経験のある人が新たに別の問題解決のために活動を始めていること、を挙げています。具体的な活動例としては、J A ひだの「SUN* SUN 会」や J A 愛知東の「やなマルシェ」、各務原市の「ささえあいの家」等の活動です。こうした「新しい市民協働」は地域の困りごとを解決するだけでなく、(当事者が意識するかどうかに関わりなく)壊れてきた「公共圏」を市民主体で作り直す可能性を秘めているという分析です。この本の主題は「ポピュリズムに対峙し得る可能性を秘めた市民的公共圏の基礎として発展しうる質を備えた市民協働」として、どのような社会運動の質を保つか、どのような思想に依拠すべきか、めざす社会正義は何かを論じられたものです。そう書くとは難しく感じるかもしれませんが「ひたすら自閉化していく個

(私)人を再び繋ぎ合わす活動」という説明もあり、本を読むことでそれぞれの活動が持っている意味を考えることができます。

上記主題のために「新しい市民協働」が持つ機能を詳しく分析されています。要約すると、①コミュニケーション理性を基礎にした(中略)道具的理性(人を目的達成の手段とみるような理性)の抑制、②運営上での一人一票性の重要性、③社会関係財を生産する特徴があり、社会的生産力を掘り起こす(相互関係性に根差した満足度の向上と身近な関係で行うための余分な費用の削減が可能)ことができる、さらにそれは人と人を近づけ、社会的な紐帯の中に入り込む役割も、が分析されています。また、「新しい市民協働」は「不正義の是正」をめざすもの、とされています。例えば近隣店舗が閉店して買い物が不便になることを解決することも、権利からみれば不正義と理解でき、様々な「新しい市民協働」が目指している活動と共通していることがわかります。

最後に上記に関連しますが、第1章の3「固有の所有観(社会的生産力と社会関係財)と自由論(出来上がった社会は変えられないと思い込み、選択する自由しかないと思わされていないか)」、第4章「参加と義務(=責任)の概念」も大事な箇所です。

この紙面では内容を紹介しつくせませんが、是非お勧めします。

研究センター12月活動の報告

- 1 日(月) 尾張地域懇談会世話人会
- 6 日(土) 東海交流フォーラム実行委員会・理事会
- 9 日(火) 名城大学ボランティア入門②
第3回協同の縁交流会
- 10 日(水) 社会的援護研究会
- 14 日(日) 難民食料支援仕分け・発送
- 16 日(火) 名城大学ボランティア入門③
- 20 日(土) 映画とハーブとお話で紡ぐ平和への想いとたすけあい
- 23 日(火) 名城大学ボランティア入門④
三河地域懇談会世話人会
生協総研全国研究集会オンデマンド視聴会

※企画は様々な事情で中止・延期・オンライン参加のみとなることがあります。

参加の前にホームページ等でご確認ください。

地域と協同の研究センターの情報

下記 QR コードからご覧ください。

ホームページ



facebook



Instagram

